

日本舞踊「黒田節」の伝承について

A study of Japanese dance

沢 恒雄

Sawa Tsuneo

遊工学研究所

Yuu kougaku Institute

Abstract : We considered the tradition of Japanese dance. Analysis was tried about the relation of language and operation in the traditional process.

1. はじめに

日本舞踊は、Japanese dance の和訳で日本のダンスの総称である。日本の伝統的なダンスである舞(まい)と踊(おどり)を合わせたものである。日本舞踊には、現在200を超える流派が存在する。花柳流・藤間流・若柳流・西川流・板東流を「5大流派」と呼んでいる。

本研究は、「黒田節」を対象に、技能の伝承について考察した。1分30秒程度の長さであるがマスターするにはかなりの困難なものである。師匠が、模範を示して、弟子がそれをまねるといった伝承方法をとる。この際、重心の位置、顔の向き、それと連動した手足の動き等、説明とビデオだけでの習得は不可能であろう。

元来、指導書として言語化されたものはない。伝承の過程の映像を示して、言葉による説明と共起する動作等の分析をした。会話分析や談話分析のためのデータ表現と分析方法に確立した方法論がない現状では研究対象としたテーマに対して独自の方法を考慮して実施する必要がある。

2. 研究目的

「黒田節」舞踊の伝承における発話と身振りの協調における談話の構造化や文脈の伝達について考察をする。

研究の最終目的は、「組織学習」と「組織文化」の関連を核として、組織活動の過程で構成メンバーが「実践知」獲得を行う場合に、動作と談話の関連の分析研究を主なテーマとしている。

3. 調査概要

お師匠さんは、正規の流派に属しており、弟子は稿者が研究の目的で指導を受けたものである。弟子入りをして伝承をうけるという正規の指導によるものではないことを断っておく。そのため、基本動作の習得に関する説明と実技を2回、実技を中心に「黒田節」の舞踊の録画は3回実施した。内容のデータ表現と分析は、最終の収録したものを使用した。

4. 「黒田節」のトランスクリプトなど

第1図表は、「黒田節」の背景となる社会的な武士の日常的な習慣や立ち振る舞い、精神的な背景などの極めて大雑把なまとめを示した。「黒田節」の伝承の談話分析の特徴は、基本的な「動作+台詞(説明)」により習得すべき目標とすることが前提となる。これがないと、基本動作からのズレを修正・補正をする時、よりどころがないため、言葉で動きを伝える時に明確な表現がでてこない。

当初、動画から動きの変化の文字化を試みたが、全てをテキストと記号で記述しきれない事と、記述した結果の情報から、舞踊の再現が理解不可能であるとして、歌詞の1字単位で断片的な映像と実時間をまとめた。

「黒田節」の舞踊の伝承のありさまは、映像で発表時に再現する。発話だけでは、伝わらない場面で発話と身振りが共起している場面が多く存在する部分を第2図表のトランスクリプトに示した。ここでは、ほとんど、学習者からの発話は無いが、師匠の身振りを真似る事に終始し、区切りの時点での「ああ〜」という一言で、この種のメッセージを伝える場合・環境の特徴であると解釈した。

5. 分析

① 舞踊の伝承では、細部について微妙な早い動きは、分析不能である事が分かった。ビデオ映像は、1秒30フレームなので、33msec以下の分解能は保証されない。目で観る連続的な動きは、その（ビデオ映像）間隔を十分に補正し得る能力がある。詳細な部分までを分析しようとする場合は、更に高速の録画機能を持つ機器を必要とする。映像に移らない部分に、師匠と弟子の関係では、師匠が細部の身振りを、身振りに加えて、発話でどのような方法で伝えているかが重要である。

ここでは、師匠の舞踊だけを見ながら、何回も弟子がまねして、正しい身振りに近づけるような方法なら、研究対象や分析対象にはならない。あくまで発話と身振りの共起を探索することである、

② ①の視点から共起の有無を第2図表に追加した。ほとんどの箇所で見られる。特に、特徴的な部分は、実時間経過の1:35から1:40の間で発生している。ここでは、「身振り+発話」の共起が「正+誤」の2回発生していることを発見した。

6. 考察した結果

6.1 「発話と身振りの記号論;第3章」の分析論による解釈

単一の身振りとその指示対象（モデル）との間にある写像性（類似性）や指標性（時空間的な隣接性）ゆえに、共起する発話にはない情報が身振りによって伝えられる事例が発見された。

6.2 「最後の見栄を張るシーンへ移行する時の修正」

師匠は、稿者の動作でいつも同じ所が間違っており、その箇所の修正をするのに、

「チョコチョコと動くのではなく」と「思い切り前に」という正誤の場合のガイドとして、稿者の「チョコチョコした動き」を真似て誤ったその動きに加えて、「思い切り前に」という正規の身振りして見せて、「正規の動作」を伝達しようとしている。

発話と身振りの間、発話間、身振り間のそれぞれに共起が生じている。さらに、「動作と発話」がそれぞれ2回がセットとなって、1つのメッセージとなっている。それぞれのセットは、階層をなしており、文脈の伝達を確実なものにしている。正規の動作に近づけるために、正誤の例を出しながら合計4つの「動作と発話」が共起している例である。

7. 今後の課題など

日本舞踊の伝承について考察したが、師匠と弟子という関係で長期にわたって伝え、結果として免許皆伝というスタイルが継承されている。本稿で示した指導時のトランスクリプトのようなテキストは原則的にはなく、口伝で説明しながら指導されている。当研究では、お師匠さんの判断で、「研究対象である」ということと、「善意の行為」により聞き出して、稿者がまとめたものである。本来は、テキスト化しないで、流派の中だけで伝承されるべきものあり、正式なものではないことを断っておく。

なお、談話分析に関わる研究の重要な項目の1つに「組織とディスコース」を設定している。この領域では、「組織学習」と「組織文化」の関連を核とした課題である。動作と談話の関連の分析研究は、今後の重要なテーマとなる。

参考文献

古山宣洋（2002）『ジェスチャー・行為・意味』、PP.55-79

第1図表 黒田節 基礎的基本的な精神・知識・体系

基本動作	武士は、常に臨戦態勢であり、歩く時、お辞儀をする時、座る時など、いつも体をどの方向にでも移動できるように行動する。
姿勢	自然体で背筋はのぼすが、ふんぞり返らない、猫背にならない。攻撃された時は、体を落とし防御の姿勢がとれるようにする。
手	左右の両手で楕円形に構えるが、肩や腕に力をいれない。
足	停止時は、カガトを付けて左右90度にひらく。
足	立っている時は、常に腰を落とした姿勢を保つ。 すり足は、急な攻撃にも対応できる姿勢である。
歩行	ドタドタ歩き厳禁、すり足で歩く。
眼	キョロキョロしない。身体の芯に対して直角の方向を見る。
お辞儀	武士の作法としてお辞儀で、45度ぐらいに傾け頭と背中は、略直線で辞儀をする。
お辞儀の手	両手は、膝から15cmぐらいの所で先端をつけ、8の字で畳につける。
腰	原則的に中腰を保つこと。 いつ攻撃をされても、体を沈めることで、防御できる体制である。
座る姿勢	両足の指近くの関節と両膝を畳に付けて姿勢を保つ。 両膝は肩幅より少し広くする。
片膝たて	座る姿勢から移行するときは、右足を前方に滑らして、ドタと着地しない。
服装	袖のある着物を着用する。
足袋	必須である。裸足や靴下は滑らないのでダメ、一回使用で結構汚れる。
扇子	必須。お師匠さんの使い込んだ貫禄のある扇子を借用した。

第2図表 共起の例：【これぞ まことの くろだ ぶし】

凡例：⇒左側は、師匠の発話、右側は稿者(沢)の発話 ▼はビデオのタイミング

経過時刻	映像	師匠の発話	稿者の発話	共起が起きている箇所	経過時刻	映像	師匠の発話	稿者の発話	共起が起きている箇所
1:02		前に体重▼	なし	共起	1:31		こ〜れ▼ぞ	なし	
1:08		こ〜れぞ▼	なし		1:32		まこ〜との▼	なし	
1:11		てを▼そえながら	なし	共起	1:34		ちよつと▼前へ	なし	共起
1:13		足を▼、そうそう、前に出して	なし	共起	1:35		く〜▼ろ〜だ〜思いきり前へ	なし	正規の模範モデルとしての動作【1回目の共起が起きている】
1:15		▼ず〜っと	なし	共起	1:37		チョコチョコ▼していないで	なし	チョコチョコの例は、実際に小さい動作で、悪い手本をここで2回動作を見せている。画像としては取り出し難い。【2回目の共起が起きている】
1:20		屈んで・・・屈んだまま身体▼を回して、	なし	共起	1:42		前に▼重心を移して、沈むの！	なし	
1:23		屈んだまま回って▼	なし	共起	1:45		後ろへ▼すう〜	なし	
1:25		ここで、キュツ▼と反る	なし	共起	1:46		ぐっと 後ろ▼へ	ああ・・・	
1:28		やや、戻って▼即、戻って	なし	2回の共起	1:48		というかんじですね！▼	ありがとうございます。	